

---

# 結婚編～僕のノルウェイの森

村上サガン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

結婚編～僕のノルウェイの森

### 【Zコード】

Z6518U

### 【作者名】

村上サガン

### 【あらすじ】

ミアリとの婚約解消して六本木族そして結婚編  
シリーズ第5章

## ノリコ（2011・10・30）

30歳になっていた。

会社後輩バットは結婚して、社内では独身は僕だけとなつた。

突撃隊や同級生も結婚していた。

ミヅコとの結婚破談で、夢だつた六本木に暮らして、

素敵な女性に知り合つたがエンがなかつた。

半年しかもたない交際が多かつた。

妹分のミサコは結婚していくまにかフュードアウトしていた。

歴史は繰り返す。

京子と似た19歳のノリコと知り合ひ、慎重に交際した。

銚子で釣り船をしている両親に挨拶に行つたことがある。

ノリコは両親が残した王子の一軒屋に住んでいた。

同棲したのがいけなかつたのだろうか。

早くけじめをつけ結婚しておるべきだった。

なぜか、そのけじめをつけるまで行かない自分がいた。

暮らし出すと釣った魚にはエサを与えなくなってしまう。

ある口間違った関係になつたと告白された。

単なる会の主要メンバーだつただけだが。

六本木族が多忙な時期だった。

ノリコをかまわないことがあって、

主要メンバーらとの外泊を許してしまつたのだ。

夜明けまで迫られたそうだ。

ノリコを許そうとも思つたが、結婚に踏み切れない何かがあつて

このままにノリコとは友人関係になつた。

僕の影響だろうか。

ノリコはパーティー屋をめざして、ソーシャルクラブの会社に転職した。

ルックスがいいので会社の社長はクラブの看板娘にした。

ノリコに男性会員が増えていった。

僕は会社のパーティーエンターテイナーを手伝つよになつた。

## 決意

毎日、祭りの場所へ帰宅する。

仕事が終わると六本木交差点にあるアマンドの前を通る。

これから踊りに行ったり、飲みに行く連中とこっしょこ歩く

祭りのよう元人であふれている。

スーパーに寄つて夕食の材料を買い、帰宅して自炊する。

踊りたくなつた時は、その頃できたばかりの「マハラジャ」まで歩いて行けた。

ロアビル近くに住んでいたので

夜は窓をしめているが、外は夜を知らない街で、

夜明けまで騒いでいる声が聞こえた。

六本木族も3年間は会員も増えて多忙だったが、

会員も少なくなつた。

再度、会を守り立てる意欲もなくなつた。

副部長が独立して新たな会を作つて会員の移籍などがあり、

六本木族という会を作つて、

あこがれだつた「マジック」を貸しきるパーティーが頂点だつた。

完全燃焼してしまつた。

登山と同じで一度登つてしまふと、再び頂上をめざしたいとは思えなかつた。

会で素敵な女性と知り合う機会は多かつたが、遊ばれていた。

悪く言えばつまり食いされていたことになる。

会長をしているので遊び人のレッテルを張られていた。

交際していた22歳のイクコが沖縄に帰つた。

沖縄の人は沖縄が恋しくなつて帰る人が多い。

フサエもそつだつたが、沖縄女性の明るく隠し事のない

自由奔放の流れにまかせていた。

複数の男性とつきあう、束縛されたくないと言つていた。

イクコとの交際が切れた時に決心した。

一人になることを恐れるな、

結婚したいと思つ女性にめぐり逢つまでは

妥協するな、ルーズに女性と深い関係にならないと決めた。

ミドリのようなケースにはならない。

女性のカンはするどいから、他に女性がいると雰囲気でわかるものだ。

一人でいることが大切だ。

そう言つても気まぐれに泊まりに来る女性がいた。

連絡先も既婚かどうかさえ知らない。

僕の部屋を別宅か一夜の宿的に利用する。

マナーはよく、あらかじめ電話で確認してくる。

その中のひとりに結婚してもいいなと思つゝ3歳のトクゴがいた。

カンだと同棲している感じだった。

この際はつきりしてみよつと思い「結婚しようか」と言った。

「それなら、それできつちり交際しよう」と彼女が言った。

数ヶ月交際したが、迷つてゐる、

彼氏とは3年も同棲していく、つながりが断ち切れない。

「たまに来るのがいいのよ」とトクコは言った。

夢の中に直子がでてきた。

「ねえ。私のこと、やはり書くの？」

「ああ、覚悟してくれよ。

書くことにしたから」

「知らないから。

お願ひ、やめてと書くても、

どうせ、書くんでしょう。

あなたは頑固ものだから」

直子はそう言いつと泣えていった。

ヤスコ、マリコのような、

人目でフリーズするような女性と知り合いたい。

駄目なら結婚はあきらめる。

そう思つて一年が経過していた。

仕事は忙しく、六本木にいる価値があるか疑問に思つよくなつた。

永住したいと思つ青山への移住を考えるようになつてゐた。

ヒトキは東横線が好きで代官山に住んでいた。

東京で東横線ほど、センスのいい線はなく青山の次の候補だつた。

冬は、スキーが上達したくて、ひとりで湯沢に通つていた。

3月7日のことだ。

上野から朝一番の新幹線の自由席に乗つた。

混んでいて、幸運にも空いていた席がひとつあり、

その席に座つた。

## 直子との出会い

新幹線で、ひとつだけ空いていた席に座った。

隣の窓側には女性が。

横顔すらみようとなかった。

無意味に女性に声をかけたりすることは控えている、  
ストイックになってしまった自分がいる。

出会った流れで、タイプではない女性と交際していると、

そんな時に限って、タイプの女性と出遭つ。

その繰り返しだ。

いつか、めぐり逢えると信じていた。

タイプの女性と出会った時に、

交際している女性がいない」と、

ひとつでいる」とほど強いものはない。

列車が出発しても、沈黙が続いた。

女性の顔を見ることさえしなかった。

しばらくして車内販売が来たので、コーヒーを注文した。

隣の女性もコーヒーを注文した。

コーヒーを受け取る時に顔を初めて見た。

素敵な横顔をしていた。

自然に声がでた。

「朝はコーヒーがないと落ち着かないんですよね」

「朝のコーヒーは欠かせませんね」と話しことに応じてくれた。

世間話がはじまった。

話しこでわかったことは、名前は直子、僕より一歳下、

ピアノの講師をしていて、

オーケストラでバイオリンを演奏している。

オケの仲間が昨日から苗場の宿に泊まつていて、

一日遅れて合流する。

下車する駅が同じ湯沢駅だった。

駅に着くと、

湯沢駅の構内を一人でスキー道具を持って歩いた。

見えてくるのは、

長身のやせ型で、脚は日本人ばなれして長かった。

苗場行きのバスまで時間があると言うので、

駅前の喫茶店に入つてコーヒーを注文した。

喫茶店に座つて正面から直子を見ると、僕のタイプを超えていた。

イングリッシュバーグマンよりオードリー・ヘップバーンに似ていた。

顔だけでなく、スタイルも雰囲気も。

「いつしょに苗場へ行きますか」

僕が行つてもかまないと言つた。

苗場にはオケの仲間が大勢で来ていて、男性もいるらしい。

そこへ行つた場面を想像した。

電車で会つたばかりの僕が行つて、

プラスになることは、なにもない。

むしろマイナスなるばかりだ。

美人を追いかけて、やつてきた間抜けな男でしかない。

僕は行かなかつた。

あまりに美人すぎる、交際できるわけがないと思った。

縁があれば縁があるだろう。

予定していた湯沢スキー場へ行くことにして、

別れる際に電話番号を聞くと、

すんなり教えてくれた。

## 初デート

東京に戻つて電話するが、なかなか通じない。

エンがないんだと、あきらめ氣味だったある日、

電話したら、運よく、つながった。

「こんばんわ」

「あー、トオルさん」

声を聞いただけで、すぐに僕の名前を告げた。

よく覚えていたものだ。

同時にデートに誘えると確信した。

3月初旬に出遭つて、初デートは3月下旬だった。

映画を観ようと銀座で待ち合わせ、

定番の待ち合わせ場所、ソニープラザ前だ。

映画館に行つたのだけど行列待ちなので、

映画を断念して喫茶店に入った。

直子は濃紺に白い水玉のワーピース、

やせてこないのでウエストがルーズな仕立てがサマになつてこる。

映画「ローマの休日」のオードリー・ヘップバーンが

スクリーングから飛び出してきたような感じだった。

「仕事、何やつているんですか？」

「コンピュータの仕事です」

「プログラマー？」

「プログラマーは卒業しました」

「じゃ、システムエンジニア」

「それも、一応卒業したよ」

「じゃ、何？」

「システムアナリスト」

「何、それ？」

「システムを分析する仕事です。」

ある事務作業の仕事を分析してコンピュータ化したら、

どんなメリットがあるか、

ユーザー や 経理部門 や トッピ に 提案 する。

システム の グランジ デザイン を 設計 し、

開発 に 必要 な システム フンジニア 、 プログラマー は 何名 必要 とか、

いろいろ 立 案 する ん です。

開発 が スタート し たら プロジェクト の 守り を する 」

「 わあ～ 難しそう 」

「 ユーザー は コンピュータ に 素人 だから

わかり やすく 説明 しなければ 理解 され ない 。

誤解 われる こと も 多い 。

「 ハ ハ ハ ユーザー が 勝手 に やつ てくれ る と 思つ て いる 。

ひとつひとつ 編み物 の よう に プログラム で

縫い上げ て いる なん て 思わ れ ない 。

政治 と 同じ で 、 つまく いって あたリまえ 必ず バグ が でる 。

すると ひとクレーム の 風 に なる 「

直子には理解できないうことが飛び交つて、

話しについていけないという顔になってきた。

「まあ、達成感のでない いつも不完全燃焼で終わる。

他の人から何に悩んでいるかも理解されない。

頭だけが疲労する、つらい肉体頭脳労働なんですよ。

どこので、直子さんの仕事はどうですか？

音楽の教師なんでしょう？」

「バイオリンだけでは生徒が少ないので、ピアノを教えてているの。

そつちの方が断然多い」

「バイオリン、いつから始めたんですか？」

「幼稚園から。

小学校から国立音大の付属に通つて、

小学校からオーケストラに入つてバイオリン演奏、ずっと音楽馬鹿  
してる」

「よく挫折しなかったですね」

「一度だけ小学5年の時に、なんだか嫌になつて、オケの演奏旅行行かないと言ひ出した

「それで?」

「親は行けと言つかなと思つたら、完全に無視されて放つておかれた。

親の勝ちね。

じめから音楽から遠ざかつてゐると、また演奏したくなつたの

「なかなか理解ある親ですね。

ウチの母親もそつだつたらよかつた

「わづだつたら、つて?」

「母は僕をピアニストにしたく、幼稚園の時にあの手この手で

教室に通わせるのです。

でも反抗して2年程度でやめました

「へえ~ パアノねえ」

「今、後悔してしまふよ。

中学の頃からバンド組みだして

最初はギターだったんですが、ピアノにあこがれるようになつて、

幼稚園の時にピアノを投げださなければ良かつた。

それで高校時代は音楽部にあるピアノで独学練習していくんです」

「バンドねえ。

高校時代にバンド組んで素人コンテストで優勝したことある。

まったくラッキーだったわ」

「へえ〜。

「僕は大学に入つてナレオというロックバンドクラブに入部したんですね」

「ナレオ？ 早稲田のナレオ？、聞き覚えがある。

TBSテレビ番組の銀座ナウに出てなかつた？」

「ああ、先輩らが、その番組の素人コンテストのバック演奏をしていて、

僕ら一年はバンドボーイで、テレビスタジオ入りしてた」

「その素人コンテストで優勝したの。

「高校三年の時だつた」

「とにかくとは、僕が、ひとつ年齢が上だから、

スタジオでニアミスしているかもしないんだ」

「へえ～ そんなことがあるのね。

今、バンド、どうしているの？」

「大学の先輩のロックバンドに誘われて

、定期的にスタジオを借りて演奏しています。

バンドのメンバーが広告代理店に勤めているので

最近、テレビのテーマ・シャルソングを録音したんですよ」

「え！ スゴイ！」

「ともでもない、地方のテレビ局で曲が流れただけですよ」

「歌なの？」

「バンマスが作曲した結婚式場用のオリジナルソングです。

一応僕が歌とピアノ、担当ですけどね」

「聞きたい」

「今度、そのテープ、持つてきまよ」



## 花見の頃

一回田のゲートのあとだつた。

電話で話していくと、直子が尋ねた。

「なぜ 六本木に住んでいるの？」

「田舎者なんですよ。

六本木に行つたとき、六本木に住みたいと思つて、

それが夢になつたんです」

「六本木の前は、どこに住んでいたの？」

「信濃町」

「信濃町つて、四谷の次の駅？」

「慶應大学病院の隣に住んでました」

「え！ その慶應大学病院で生まれたの。

近くに花屋なかつた。そこは親戚」

「あ～あつた、隣に

「ふうん。不思議ね」

「直子さんの誕生地に住んでいて、花屋でニアミスしていたかも」

「そんなことがあるのね」

「例のテープだけど、こいつ持つてこいつか?」

「日曜はどいつ?。その日は上野でオケの仲間と花見しているから、

ちよつとなら抜け出せる」

4月、桜が開花している頃だった。

上野の西郷隆盛の銅像の前にいると、

直子が肩にバイオリンケースをしょつてやつてきた。

「花見いいの?」

「ちよつとなら、いいの」

テープを渡す。

「ありがとう。楽しみ」

バイオリンケースを見ながら、尋ねた。

「花見で演奏するんだ。クラシック？」

「まさか。歌謡曲よ」

「ここでクラシックだと言われると  
なにか近寄りがたい気がした。」

歌謡曲と聞いて、さらに親しみを感じた。

「カラオケなんか、するんだ」

「うん、『つぐない』が愛唱歌」

「テレサ・テンか。ちょっと暗いね」

「歌詞がいいのよ」

そろそろ時間が経ったと思つて

「じゃ、またね」

すると、直子が言つた。

「ねえ、今度、六本木のカフェバーを案内してくれない？」

「ああ、いいよ。インクスティックでも行こつか」

「安全地帯の出演したバーね。楽しみ」

夢の中に、直子がでてきた。

「ねえ インクスティックのあとのこと、どう書いたの？」

「読み上げるよ。」

僕らは六本木のカフェバーに初めて飲みに行つた。

直子は酒には強いクセに、酔つてしまつたのだろうか？

それとも演技なのか、

涙目になつて『信じていいのね』、と直子がからんできた。

僕が結婚しようとしたからだ。

单刀直入にプロポーズした。

その日は部屋に泊まつた

「だから、いやなのよ。恥ずかしい」

「今思うともう年齢的に結婚しなくてはいけなくて、お見合いした相手がいたんだろう。」

そんな時に、僕と知り合つた

「そうかもしない。

私、トオルに言つたわね。

今からお見合い相手に会つて、断つてくれる。

でも、なぜ、そう思ったの？」

「だつて、直子のような美人が僕に積極的になるわけがないさ」

「わたしは、自分から好きになるタイプだと思うの。

あのテープがいけないかもね。

ずっと聴いているうちに、歌が頭でグルグルまわって

この人と結婚するかもと思った」

「そうだよな。

あのテープの歌詞は『結婚しよう』とか『今日は結婚式』なんて  
結婚式場のCMソングだからね。

本当は、そんなつもりで聞かせたのではないのだが。  
ただ、僕らのバンドの曲を聞いて欲しかつただけなんだ

「トオルの声つて沢田研二に似ている、そして不思議な人よ。  
トオルのような人に、これまで会つたことがない」

「ああ、よく言われる、変な男、変人だと。

母にも言われているよ。

あんた、変わつているって」

「ヴィトンが好きだし、着ている服も見たことのない独特的のセンス  
よね。

「コレのシャツ、あれ好きよ」

「チャコールグレイのタペストリー柄のシャツか。

結局、直子が、あのシャツはずつと着てしまつんだよね」

「着たいと思つたような色柄だからよ」

「ほんな変な男だけど、僕は直子に首つたけになつた。

結婚したいと思つたんだ」

確率からすると文句のないベストカップルだ。

僕の血液型はO型で土星人、直子はA型金星人、蟹座同士。

六星占術で土星人と金星人は結婚と仕事、ともに最高の相性。

土星人は白黒のけじめをはつきりさせないと気がすまない、中途半端、ルーズといったことが大嫌い。

人付き合いが大の苦手。

そのかわり孤独に強く、だれの干渉も許さない“自分の世界”を持っている。

一匹狼的で、周囲の評価に無頓着。

金星人とだけ、相性がいい。

すべて、僕にあたつていた。

金星人は結婚したあと家庭に入るより、仕事を続けるタイプ。休息ということを知らない金星人は、忙しい状態でないと落ち着かないところがある。

外面のよさから、金星人ほど営業に向いている星人はないといつていい。

社交性があり、どんな人とも合わせることができる。

もちまえの個性的なファッショング感覚、すぐれた美的センスから、ファッショング関係や芸術分野で成功をおさめることができる。

行動的で束縛を嫌う金星人は、家庭に落ち着くことをあまり好まない。

結婚しても、お互いに干渉し合わない関係を望み、女性の場合、晩婚の傾向にある。

直子はその通りの女性だった。

血液型では男性O型と女性A型では、O型の野性的で大胆なところにA型は魅力を感じるが、O型の独断独走にA型女性は嫌気を感じるそうだ。

星座では蟹座同士は基本的恋愛観が一致して、とてもいい相性だと語る。

O型の独断専行、大胆なる結婚への猛アタックがはじまった。

「6月に結婚しよう」と僕は言った。

直子は時期早々と悩んでいた。

僕はまったく迷うこととはなかった。

すべてを直子との結婚にかけて、集中した。

出遭つて1ヵ月が過ぎたばかりだが、長い春になつてはいけないと思った。

「お互いに思つたときに、さつと結婚しよう。

結婚とは賭けのようなものだ。

結婚はしてもしなくて後悔するものだ。

思いつきり飛び込む勇気が必要だ」と、主張した。

直子は答えた。

「清水の舞台から飛び降りるようなものね。

友人に相談したのよ

「なんて言われた?」

「結婚詐欺師だと……」

僕は納得した。

六本木に住んで、外資系に勤めて、バンドをやつしていく  
知り合って一ヶ月で結婚を急ぐ、

結婚詐欺師と言われても仕方がない。

猫が直子の結婚を決心させた。

巣鴨駅で待ち合わせして、直子の両親に挨拶に行くと、両親は猫好きで、巨蟹も飼っていた。

挨拶を終えると、スープの冷めない距離にある、直子の住んでいた二階建てのマンションへ移動した。

一階にある直子の部屋は2DKで、かたづいていた。

和食が好きな僕に、肉じゃがなどを作ってくれた。

その日は泊まる、朝方のことだった。

「影千代がわかっている」と耳元でつぶやいて、涙する直子がいた。

布団で寝ている僕と直子の足元の真ん中に影千代が入ってきたのだ。

影千代とは直子が飼っていた猫の名前だ。

名前からするとオスだが、メスだ。

黒と白のツートンカラーで黒いマスクをしていた。

名前は漫画「忍者ハットリくん」に登場する猫に

似ているので、そこからとつたそつだ。

変わった猫で、直子以外に誰にも絶対なつかないそつだ。

猫好きの両親や下の一人の弟にも、なつかない、近寄りもしない。

影千代に近づこうものなら、さつと逃げていく。

なんとか捕まえても「フー」と威嚇したり、

爪を立てて激しく抵抗する。

直子の部屋に入った時、影千代は外出中だった。

昼間はどこかの軒下などに潜んでいる。

直子が在宅の時は、部屋にいるが、

他人が来ると逃げ出してしまう。

人間嫌いで、夜になつてヒトケがなくなると姿をあらわす。

直子が言つた。

「ビックリしたの。

どんな人にも、なつかなかつた猫よ。

まだ生まれたばかりの捨て猫だった時に拾ってきたの。

仕事で昼間は相手できないから、ずっと部屋に閉じ込めていて、

他の人に接することもなく、夜帰ってきた時だけ、可愛がった。

そんな育て方をしたので、変な猫になった。

不思議よね、影千代は、あれからトオルがいても逃げないのよね。

トオルと暮らすことを覚悟しているみたい」

直子の猫だから、こちらから積極的に可愛がりにいくだろう。

でも僕には、僕独特のアプローチがある。

最初に足元に来たからといって、僕になつたわけではない。

影千代は、常に距離をおいて僕の前にいた。

逃げ出したり隠れることだけはしなかった。

影千代から、近づいてくるまで何もしなかった。

僕は犬を飼った経験はあるが、猫を飼った経験はなかった。

犬のよさもわかるが、直子と出会い、女性と同じ気まぐれな、猫も好きになってしまった。

## 麻布南部坂教会

6月1-6日に結婚する。

式場をどこにするか、二ヶ月を切つていた。

僕には理想の結婚式があつた。

麻布南部坂教会で式をあげて、帝国ホテルで披露宴。

大学2年の時だつた。

学費値上げに反対して全学ストライキ突入。

革マル派が強かつた時代で、

後期試験が教場外試験となつた。

2月1-7日に大学から教場外試験の内容が届いた。

すべてレポート提出ということなり、その内容が送られたのだ。

14科目、各々数十枚にまとめる論文形式で、

一部を除いて3月6日締め切りだつた。

レポートに必要な資料を探すために一番いい図書館を探した。

日本で一番蔵書数の多い国会図書館は資料取り出しが、  
いちいち申し込み閲覧システムなので効率が悪い。

麻生の有栖川宮記念公園にある都立中央図書館をみつけた。

国会図書館に次ぐ蔵書量で、5階建ての近代的建造物、食堂もある。

「1月20時まで籠つてレポートを書くことにした。」

当時信濃町に住んでいて、バスで20分もかからず、便利だった。

図書館に通つている時に何度も、映画に出でるような結婚式を見た。

公園から見えるドイツ大使館の隣にある南部坂教会での挙式だ。

微笑む一人へのライスシャワーは幸福の絶頂シーンが目に焼きついている。

小林縁と結婚することになつて、

南部坂教会と帝国ホテルを予約した。

縁が結納の前に結婚を破談にしてしまつた。

直子がでてきた。

「そんなことがあったの？隠していたのね」

「ああ、そんなこと、話せないだろ？」

ナオだつて、影千代は元カレの忘れ形見なんだりつ

「言つたけ？」

「つきあつて、随分経つた時に、モメたことがあつたね。

その時にポツリと言つたぞ。

「思いもかけない話しに、びっくりしたよ」

「お互い様ね。」

しかし私とトオルに共通しているのは、

派手好きなところね」

「縁との破談で、多くのことを学んだよ。

縁が一方的に好きになり、それを受け入れたんだけど。

傷ついた分、人の痛みがわかるようになつた。

長い春は、よくない」と。

優しさとは何か、あらためて学んだ。

別れた原因は、片一方だけが悪いということはない。

男女どちらにも欠点があつたんだ。

「僕はそう思つよ」

「変に優しすぎるところが、欠点かもね」

## ノルウェイの森で結婚式

教会で思い出したことがある。

東京に来てはじめて住んだ田白で聞いた鐘だ。

そう、小説「ノルウェイの森」の舞台にある教会。

正式には田白東京カーデラル聖マリア大聖堂と書いて、

東京の教会の総本山、

明治時代に建てられた日本最初の聖堂だった。

1945年の東京大空襲で焼失してしまい、

現在の約40メートルの高さの大聖堂は建築家丹下健三の設計で、1964年に落成し、

フランスのルルドの泉の洞窟の岩場も再現されている。

18歳の時に大聖堂の鐘を聞きながら寝起きしていた。

僕はカトリック教徒ではないが、

なぜか結婚式は教会しか頭になかった。

映画好きの影響と、幼稚園がカトリック教会だったからだろう。

教会に申し込みにいくと、

仮の教徒になれば、結婚式を挙げられると言ひ。

毎週、講習会に参加するのが条件だった。

直子と二人で通うと、講習の内容は夫婦生活でのカトリックの教えや、

結婚後の人生の入門みたいなものだった。

披露宴は

目白通りを挟んだ、カテドラル教会の斜向かいの「椿山荘」に決めた。

小説「ノルウェイの森」で登場するホタルは  
「椿山荘」から飛来していく。

直子が言った。

「目白にホタルがいるの？」

「うむ、何度も飛んでいるのを見たことがある。

椿山荘で放し飼いされたホタルが迷子になるんだろう。

夜アルバイトが終わって帰る時に、胸突坂を通る、  
街灯がなく、暗闇で怖かった。

神田川を渡つて 右に松尾芭蕉庵があつて、

そこからノルウェイの森にはいる急坂なんだけど、  
名前の通りに胸を突く坂なんだ。

そこへ道案内するように螢がでてくるんだ。

右は椿山荘の塀が続き、左は永青文庫や妖しげな洋館がある。

小説では、主人公の下宿先和敬塾にも飛んできた。

椿山荘と和敬塾はホタルが飛んでくる程に近い場所にあるんだ

## キャンティーで結納（2011・10・30）

知り合つて二ヶ月経つた5月、  
六本木飯倉にあるキャンティー本店の  
二階を貸し切つて結納を行つた。

店の洋一さんが鯛一尾を出してくれた。

淡いピンク色の和服を着た直子をはじめてみた。

思えばキャンティとの出会いもノルウェイの森だった。

洋一さんの弟と下宿先でいつしょにならなかつたら

キャンティに通わなかつただろうし、  
六本木に住みたいとは思わなかつただろう。

両親は直子に女優というあだ名をつけてしまつた。  
友人に会わせるたびに、同じことを言つた。

新居は六本木を離れて青山にしようと思つたが、

バンドの先輩を手本にすると、

新居は妻の実家に近い、スープの冷めない距離がいいらしい。

直子のことを考えて南大塚に新居を決めた。

最寄り駅は大塚駅で、直子の実家とはスープまではいかないが、  
シチュウが冷めない距離だつた。

式場と披露宴予約、結納が終わり、  
新居決定、ハナムーンも予約した。

ひとつひとつ、直子に了解を得ながら進めた。  
あとは、直子のマリッジブルーだけが心配だった。

破談されても後悔しない、

その時は、いやがなく去る覚悟だけは、できていた。

(終わり)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6518u/>

結婚編～僕のノルウェイの森

2011年11月15日12時39分発行